

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

23. タマラの物語

「あなたの古い自己もそうだけど、私もバウチをよく知っているの。彼とは EgiLand を通して知り合ったのよ。彼が Eigi と例の賛歌をつくったと聞いて興奮したわ。当時私はエイジランダーだったの。エイジランドは私の自己意識を随分変えてくれたし、エイジランダーの一人であることは、とても心地よかったわ。ゲーマーズ・ギルドに例えられるかしら。あらゆるキャラクターを選ぶことができながらも、どこかに属しているってすごいこと。ほとんどの人たちには得ることが一杯あるのよ。属すということは、特定の考え方をするということだけど、以前のようなドグマチックなものでは決してないの。もっと話を聞きたい？ それなら本を戻してちょうだい。これからはいつでも読めるし、経験し続けていくこともできるわ」

もちろんそうだと。僕たちはベッドに腰掛ける。ものすごい親近感を覚える。僕の姉妹と話しているみたい。

「当時、私はシングルマザーだったの。私の娘エバは 2015 年だと 3 歳よ。私は娘と一緒に当時のボーイフレンド、リチャードと暮らしていたの。リチャードは娘の父親じゃない。私はいつだって、人生とセックスを楽しむ女だったわ。彼といると、私はいつでも穏やかな気持ちでいられたの。自分は淫乱なのかと思ったこともあったけど、自分はそれだけの者ではないと気付いたわ。私はセックスするのが純粹に好きだったけれど、世間ではいつも自由や束縛、依存、期待がセックスに結びつけられていた。そして他者をジャッジする人たちも。彼らは自分自

身に向き合うのが怖かったのよ。2015年の前半、何かが私の中で変わった。リチャードとの関係も失敗に終わりそうなときで、私はとても内省的になったの。自分宛に書いた手紙のことを思い出すわ。目を閉じてちょうだい。お互いにシンクロしてみましょう。そうすればあなたにもその手紙が見えるから、一緒に読むことができるわ」

初めは当惑したが、彼女の誘いを受け入れて目を閉じた。

「目を開けずに私を見て。私が見える？」

僕が大きな声でイエスと答えると、彼女は話し続ける。

「テーブルについている私を見て。私は文具を前にして座っている。私はちょうど万年筆をしまったところ。手紙を読めるように持ち上げているわ。その手紙に集中して。私の目を通して手紙を見て」

魔法が働いているみたい。**彼女**の手紙がはっきりと**僕の**目に見える。

「手紙を読める？」彼女が尋ねる。

文面に意識を集中して声に出して読み始める。最初は躊躇したが、あとは流れるように読んだ。

「孤独感は常にそこにある。時にはあなたが孤独を受け止め、時には孤独があなたをさらう。今は孤独が私をさらっていった。孤独が私を支配する前に、私は孤独を取り戻さねばならない。私は孤独の意味を理解しようとしている。私は独りぼっちになるだろう。多分それだけは分かっている。独りぼっちになったらあなたは どうする？ 考えるのよ！ あなたは何を考えるの？ あなた自身について、自分について。私の最初の結論は、自分が幸せじゃないこと。どうして私は幸せになるために何もしないの？ もし私が自分で幸せになりたかったら、私は一人でいなければならない。リチャードはいつも私といる。私たちの将来、愛、一体感、私たちはこれらのことを十分語り尽くした。私がそれらを手放して自分の道を行くことができるように。彼の許を完全に去りたくはないけれど、今の私は一人になりたい。だけど彼もそれを望んでいるだろうか？ 考えや質問はもう要らない。行動を通して解決するしかない。私はまだ彼を以前と同じように愛しているけれど、エバと二人になりたい。そして私一人だけにもなりたい。こうして自分が、そして彼も幸せになれるか確信はもてない。それはすごいことだろう

けれど、想像しにくい。私は自分の不幸を他人のせいにする臆病者なの？ 人を助けたいと思っている人は大勢いるけれど、何よりも大きな助けは、私が、自分は何者なのか、何をするのか、自分で決意することよ。唯一それだけが、私がいなければならないことだけど、本当につらいことだ。私はそうしなければならないし、そのことを知っているし、それを今書き記している。でも、本当の答えは何だろう。私は自分がじたばたしているのが分かる。ロープを探して、握れるものを探している。自分を救うロープは自分に他ならない。そのことを知るのって助けになる？ もっと深みに落ちないように、私は人生に、自分に "イエス" と言おう。それに私たちの愛はとても偉大だから、二人のことにもさらに取り組もう。嘘や隠し事をしないで、自分にしているのと同じように彼に話そう。今までは問題がなかったのも当然だわ。自分に嘘をついて、それ故に彼にも嘘をついているのだから。私は勉強がしたい。自分の家を探したい。彼と一緒に実家に滞在して私の母親と仲直りしたい。夏には長旅に出たい。2月に旅行がしたい。**自分自身**を見つけたい。正直でいたい。書き記したい。ようやく気分がましになった。幸福は感じられないままだけど」

読むのをやめてもまだ彼女の声が、現実離れして反響していた。

「この文章が、あなたが手にしていた本の一部になったのよ。今の手紙文を載せたこの本は、たくさんの本棚で見つけることができるわ。多くの人たちが、その中に自分自身を見ることができた。そして彼らは、私がこれから言うことに感謝してくれたのよ。手紙の最後の文は消しておいてね。自分は決して幸せになれない、私は自分にそう言い聞かせている限り、決して幸せになれないと気付いたの。私の意識にとって、それが最初のパラダイムシフトだった。こんな考え方をしたって何も良いことがなかったから、そういうふうを考える癖を直したの。私は幸せになりたかったんだもの。思考は現実になる。私はそれをロンダ・バーンの『シークレット』から学んだわ。あなたがその本をどう思っているかも知っている。はっきり言えば、幸せを求めている人にはすごく危険な本にもなりうる。なぜなら、経験していることは**すべて**経験したかったことなのだと、その本はちゃんと伝えていないからよ。人々はそういうことを意識していなかったの。今日では誰もがそれをはっきり知っている。あらゆるものが興味と興味が結びついたものに

従っており、何かを願うから、それを経験するのではないということをね。私は人生を楽しむことを学んだわ。手紙を記さなければ、そうならなかったと思う。

2015年8月、たまたまあなたの物語を読んだの。ワクワクしながらどんどん引き込まれていったわ。そうしたら私の手紙が出てくるじゃない。私は、手紙を取り出して比べてみたわ。**まったくのコピーだった！** バウチはどうやったのかしら？ そんなことあるはずないじゃない！ 私はネイサンの存在を信じ切れていなかった。だから今日、あなたに会えてとても幸せよ。たとえネイサンのことをよく知っているとしてもね。これは私にとっても特別な瞬間なの。ずっと待ち続けていたのよ。私も2020年の世界であなたに——2015年のネイサンに——会える数少ない一人だと知っていたわ。ここでは一切がゲームよ。この5年間、あなたが本当に存在しているのか、それともバウチとネイサンの創作なのか、誰にも分からなかった。だけど、バウチは私の手紙を書き取ったのよね。

私は自然とバウチに興味をもって、何者なのか調べたの。彼の本のおかげで再び人生に喜びを取り戻したのは、私だけではないでしょうが、著作以外にはどんなことをしている人なのかなって。

そうやってエイジランドを知ることになり、私が手紙に書いたことは真実だと悟ったの。私はまだ何も実行しないままだった。リチャードとはまだ一緒に暮らし、愛し合っていたけれど、どうしても一人にはなれなかった。だから私は決意したの。というより、自然にそうなったんだわ。本当に洞察力が働いたのだと思う。心は重かったし随分緊張していたけれど、バウチが書いていた"別の種類の別れ"について打ち明けたの。あなたにも見つけられると思うわ。大切なことは、客観的に話し合っ**て自分に自由**——彼が私から奪っていたように思っていた自由——を与える機会を得たということ。私が母親に電話すると、とても喜んでくれたわ。私は母の気持ちに感謝して、自分探しをしなければならないことを伝えたの。母がエバのことを聞いたので、エバは私と一緒にいると答えた。

母は、エバにあんまりストレスがかかるようなら、喜んで面倒を見に行っ
てあげると言った。(母はいつも私に高圧的で、一緒にいると気がめいるので、もう母のところには行かなくなっていた。その電話のときもちょっぴりそんな感じだ

った)。母も本当に寂しかったもんだから、しばらくエバをみてくれることになったの。その年の最初の数ヵ月間、母もまたいろいろ思うところがあって気付いたのよ。私の問題の多くは、母が私の思うようにさせてくれないところから来るって。彼女は**いつも**私に干渉していたの。母の申し出は、母が私の意向をくんでくれたということ。エバにしばらく母と暮らすかどうか尋ねたら、とてもはしゃいでいたわ。私は人生で初めて**自由**になれたの。私は自分が何を経験したいのか知っていたわ。それはこの物語よ。それはバウチを通して私たちにもシェアしてもらえる**あなたの**物語でもあるわ。多くの人たちにとって、あなたの物語はずっと待ち望んでいた神の印だった。

そうして私は船出した。衣類を詰めたバックパックと、カメラとラップトップが荷物のすべてだったわ。リチャードと家を出たとき、私が予想していたのとは様子が違った。彼もその本を読んでいたのよ。

『それぞれの道に進み、連絡を取り合おう。そしてお互いが幸せになるように、旅の間経験したいことは何でも愛をもって許し合おう。お互いに立ちはだかるのではなくね』彼はそう言ってくれた。『愛してるよ。君が考えることはすべて言葉や行動に移していいからね。僕は、君の素晴らしい経験も含め、何もかも知っている必要はない。だけど僕はいつでも君のためにいるよ！ 連絡してね。どうすればいいか分かっているだろう。明日は僕も荷造りして発つよ。この冒険を大切に経験しような！』

私は啞然としたまま立っていたけれど、ふいに涙がこぼれたわ。彼が私を腕の中に引き寄せると、私たちは一緒に泣いていた。深く愛し合っていた関係が終わったから泣いたのではないわ。私たちは愛し合ったまま、**とうとう**新しいスタートを切る方法を見つけたからよ。生まれ変わるようだった。その夜はとどまって、早朝まで愛し合った。いつもと違ってとても自由でいられた。期待からの自由、解釈からの自由、思考の自由、失うことの恐れからの自由、標準通りでいることからの自由。何もかも自由に流れた。私たちを通して流れ続けていたわ。私たちは**一つ**だった。私たちには、お互い別の方向に進んでいくとしても、翌日の旅は**一緒に**始まるのだと分かっていた。日が昇ると、彼は私の目を見て言ったわ。

『君は愛の芸術家だ！ もし、いつか君がどうすれば人の役に立てるのか迷ったら、そのことに意識を向けてごらん！』